

大橋慎三などと交はり、さらに薩州の小松帶刀、大久保一藏、西郷吉之助等と通じて、頻りに倒幕の畫策をめぐらせてゐた。

岩倉具視の考へでは、「皇政復古の大業を成就するには、どうしても強藩と結ばなければならぬ」といふのであつた。それで「皇國合同策」といふ意見書を上つたこともあり、その草稿は、井上石見、藤井宮内などの手を経て、小松、西郷、大久保等にも贈つた。慶應二年、幕府がいよ／＼長州再征をするといふときにも、かれはその不可なる所以を論じて朝廷に献白してゐるが、幕府の軍がだん／＼負ける様子を見て、この機會に乗じて、一新の政事をすべきであると「一新策」といふ書を献じた。朝廷では、お取上げにならなかつた。

その後、幕軍が敗退の結果、戦さを止めたので、その機會に乗じて、朝廷では大會議を開かれることとなつた。けれども具視はもとより蟄居の身分だつたから、自分が出るわけに行かぬので、岩倉村に出入する股肱ともいふべき入谷駿河守、小林彦次郎、橋本鐵猪などいふ人を使つて、有司の公卿を説かしめた。そのとき奮然として、この舉に賛成したの

は中御門中納言經之卿であつた。

會議は慶應二年八月三十一日、中御門經之、大原三位實徳、その他堂上の公卿二十人早朝うち揃つて参朝した。中には、中川宮(その頃賀陽宮といつた)と刺違へるといつて着籠を着て参朝したものもあつた位で、その光景は實に物々しき限りであつた。

二條關白齊敬が、謹んで諸堂上の謁見を請ひ奉る旨を奏上に及ぶと、主上は便殿に出御あつて、一同を召させ給ふた。

賀陽宮、關白以下みな御前に伺候した。

そのとき大原三位實徳は、恭々しく進み出て、書狀を朗讀した。

「その第一は、目下諸大名を京都へ呼寄せて天下公論の歸するところで事を決するといふことではありますが、まだ御召集の令が出ませぬ。この事は目下の急務であるによつて、速かにその令を御發しになること。

第二には、天下多事の今日、人材を御登用になること。これまで國事について罪を得たる有志の公卿を皆御赦しになるやう。

第三は、長州征伐の兵を解くこと。

第四には、朝廷の根軸が鞏固でなければならぬが、今迄、朝廷の廟議で決した事でも、幕府の方からやかましくいふとか、又は外から異議があると、忽ちグラ／＼と變つて、朝令暮改の弊があるから、十分に朝廷の根軸を鞏固にして、施政の方針を變へないやうに、朝政の一新を圖るべきこと」といふ四ヶ條であつた。

この時、二條關白は、靜かに御前に向ひ、

「第一條は、臣の職責を盡さざるところによります。謹んで責を負ひます」と申し上げた。と、大原三位は更に、

「賀陽宮は國事を補助の大任に當らせられるからには、その責任なしとは申されぬ」と劾奏がくそうに及ぶと、賀陽宮は、

「臣不徳にしてこの言を聞く、洵に遺憾に存じます」と云つたから、大原三位は、

「然らば宜しくその罪を引いて御退職なされよ」と疊みかけて責めた。

この時、主上は御叙明にして事の道理は胸にたゞませられたが、座に權勢ある中川宮、二條關白ある手前、逆鱗を装はれ、キツと大原三位を見つめて、

「たゞ今、汝等の言ふところを聞くに、天下の急務といつて奏上する事甚だその意を得ない。昨今の兵庫開港の如き事こそ眞に國家の安危に關する重大事であるのに、眞に國家を憂ふる精神ならその時こそ進言すべきを、今日に至つてかゝる事を奏するとは、甚だ朕の意に落ちぬ」と仰せられたので二條關白は恐懼して、

「臣、位首相にあり、朝政の失體を來たすこと、實に大原重徳の言ふ通りであります。これ臣の罪であります」と言つた。賀陽宮も亦、

「臣輔翼の任にあつてその道を誤り、公卿等をしてかくの如き奏上なさしめた罪は免れま

せぬ」

すると主上は、大原三位に向つて、

「朕、汝重徳と姑らく時事を議したいが、來る九月二日、汝一人にて参内するやう」と仰せられ、諸卿は皆拜謝して御前を退去した。

この八月三十日の議論は、辰の刻（午前八時）から丑の刻（午前二時）まで實に十八時間の長きに涉つた。そのため二條關白は上表してその職を辭し、賀陽宮は同じく國事掛を辭して引籠られた。

九月二日、大原三位はひとり参内すると、主上には御小座敷に出御あらせられ、左右を退けて之を引見し、

「先達ての建議は朕の意に適つてゐる。どうか今後も腹藏なく言上するやうに」との有難き仰せに、大原三位は感泣して、前日進言したことをさらに忌憚なく奏上するところがあつた。

しかし大原三位の諫争は、幕府の忌諱に觸れ、十月二十七日山階宮は蟄居、正親町大納

言宰相父子は閉門、それ／＼處罪された。が、さらに一體この會議は何人の計畫であるかを探るに、豈圖らん、岩倉村に當時蟄居してゐた岩倉具視の策だといふことが分つたので、幕府は大いに怒り、ただちに會津桑名の兵を以て岩倉邸を取り巻いて、つひに彼を監禁してしまつた。

洛中の怪事件

恰度その頃、京都で又一騒ぎ起つた。

それは十津川郷士中井庄五郎、前岡力雄、深澤仲鷹等が、ひそかに三條橋西の揭示場に行つて、「長州朝敵」の制札を抜きとり、その朝敵の文字を塗抹して、これを加茂河原に棄てた。そこで改めて又新調の制札をかけると、九月四日の夜、又もやこれを捨てた者があり、その怪事件の噂が忽ちパツと洛中にひろまつた。

ところが更に奇怪なことには、今度は岩倉具視を中心とする一味の者が、三條大橋に張

紙して、賀陽宮、二條關白、野宮中納言、廣橋大納言を惡罵し之に恫喝を加へる文字を書
いて庶民の目を驚ろかしたものだ。

「これは痛快々々。足利將軍の木像梟首事件以來の珍事件だ」と、京の童は寄ると濁ると、この噂でもちきりであつた。

町奉行は大に怒り、早速この恫喝文を引剝ぐとともに、又新しく「長州朝敵」の制札を立て、こんどは守護職に頼み、新選組に命じて監守させることゝした。

新選組隊長近藤勇は、部下三十餘人を三組に分けて、新井忠雄等十二人を高瀬川東の酒屋に伏せ、原田左之助等十二人を先斗町北の町會所に、また大石鉄次郎等十人を三條橋東の商家に潜伏させて、別に橋本會助、淺葉の二人は乞食姿に身をやつして、三條橋下に伏せて、曲者逮捕の手配をして待ちうけることゝなつた。

時は九月の十二日。折柄昇る月光に、圓山のとある旗亭の二階廣間の障子を皆あけひろげて、今しも牛飲馬食、酒を呑んで盛に氣焰を擧げてゐる浪人共がゐた。これぞ土州の宮

川助五郎、安藤鎌次郎、藤崎眞五郎、松島和助、澤田屯兵衛、岡山禎六、本川安太郎、中山鎌太郎などいふ血氣の壯士たち。

酔ひに乗じてその中の一人がいつた。

「おい、みんな知つとるか。三條の制札が又建てられたのを。あれを取り捨てる勇氣はな
るか？」

すると、その聲に應じて、

「面白い。やれ〜、やつつける！」

「ちやこれから直ぐ出かけようか。その上で又呑まう」

「よし、行け！」

忽ち、一同立上り、勘定もそこ〜に、相率ゐて三條西の掲示場へやつて來た。

一人がスル〜と木柵を攀ぢのぼつて、やがて「長州朝敵」の制札を引抜くと、それを河中に投げこみ、

「痛快々々」

と一同快哉を叫んだ。

ちやうど、この時、町會所に潜んでゐた原田佐之助の一團は、どつと黒い旋風を巻き絡めて来るが早い、いきなり、中の二三人が素手で、

「神妙にしろ」

と、躍りかゝるが早い、土州藩の宮川五郎の腕を捕えた。

「新選組に睨まれたからにはもう駄目だぞッ」

と力一杯引き倒さうとするのを、

「何をツ」

鋭い氣合と共に、肩越しにドンと大地へ投げつけた。アツと右手を捻取つた一人は、前に外されて、ヨロ／＼と泳ぐところを、物の見事に背すぢにかけて、

「えッ、犬めが——」

と抜き打ちにたゞ一浴びせ。

「殺られた！」

と、月光に血煙り立つた捕吏の斃れるのを見るより、忽ち十一の影が圓陣を作つて、おのおの大刀の柄に手をかける。

土州藩同志の八人は、これまた抜刀して宮川を救援すれば、このとき又彼方より新選組の新井忠雄の一隊が躍り出して退路を絶ち、こゝに土佐壯士の一團は挟み撃ちとなり、たちまち屍山血河の凄惨な修羅場が展開された。

かくと見るより近藤勇は、

「用捨なく斬れ！ 斬れ！」

と號令し、われから太刀を眞向にふりかぶつて壯士に立ち向つた。

何しろ相手は多勢、宮川助五郎はじめ戦ひながら退いて、三條南東路に到れば、道路が凸凹で自由がきかず、藤崎はつひに斬殺され、宮川は傷づいて捕はれ、安藤その他はみな苦戦して遁げ去つた。

かうして宮川助五郎を捕へて玉生村に意氣揚々と凱歌をあげて引揚げた近藤勇は、漸くその眞相を掴み得たので、そのことを京都の土佐藩邸に知らせると、留守居役荒尾騰作は

大いに驚き、早速、坂井藤藏を壬生村の新選組にやり、

「助五郎は、とつくに脱藩した者であるから、藩邸に引渡さるゝことは當人の望まぬところであらう。この上は公儀において、然るべく御處置相成るやう」と申入れた。

そこで近藤勇は宮川に向つて、

「どうぢや宮川、藩邸に引渡さうか、それとも公儀へ引渡さうか？」

と訊くと、血みどろの本人は流石に頭を振つて、

「武士たる者、生擒の恥を蒙り、何の面目あつて藩邸へ送られやう。すみやかに、首を刎ねられよ」と言つた。

この一言に、流石情けを知る近藤は、

「壯なるかな其の一言、拙者もいつかは貴殿のやうな立場に立つ時も來よう。武士は相見互ひだ」

といつて、その後は獄舎に繋いで出来るだけ優待した。

例の足利將軍木像梟首事件以來、しばらく迹を絶つてゐたこの種の事件が、慶應二年秋。幕府が長州征伐に敗けてからといふもの、又頻々として起りはじめたのであつた。

主上神去り給ふ

十一月に入ると、尾張前大納言慶勝は封事を上つり、慶喜を大將軍に任命あらせ給はるやうにと奏請した。主上は、この儀を御聽許あらせられ、二十七日、傳奏、議奏を以つて、教旨を二條關白に傳へ、その準備を命じ給ふた。

かうして十二月九日、勅使として飛鳥井中納言雅典、野宮中納言定功の兩卿は二條城に臻つて、慶喜に授くるに正二位、權大納言、征夷大將軍、源氏長者、淳和、獎學兩院別當兼右近衛大將、右馬寮御監の宣旨を以てした。在京の諸侯ことごとく登城して、その式に陪し、古例によつて、おのゝく太刀、馬代を獻じて、これを賀した。

かくて、慶應二年もいよく押しまつた。

こゝに又忘れてならぬ凶事が生じた。遠く吾妻の空に唯一人、行ひ澄まして止まつてゐられた和宮にとつてもそれは喪心落膽の一大凶事であつたが、孝明天皇の突然神去りました御事がそれである。

即ち慶應二年十二月十六日、主上は遽かに御發病、しかも輕からざる御容體と拜されたのである。

二條關白以下諸公卿ことごとく參内し、將軍慶喜、守護職容保、所司代定敬も亦參内して天機を奉伺した。

やがて、主上の御病症は御痘瘡と決し、七社七寺に命じて御平癒を祈つた。當時、民間にも流行のことを聞かなかつた痘瘡が、早くも九重の御奥に侵入したといふことは、洵に恐れ多い極みである。

あゝ天無情、御苦惱十日にして、つひにその月二十五日、崩御あらせられた。寶算三十六。朝廷においては諒闇の令を布かれ、世は常暗におちいりて、上は宮家公卿、諸大名より、下は村野の匹夫匹婦に至るまで、歎きに沈み、日月ために光なく、山河愁ひに閉され國民ひとしく慟哭哀悼した。

こゝに於て、攝政關白議奏傳奏の人々、百官百司の公卿と詮議を遂げ、假に皇太子睦仁親王を推尊して御位に即け奉り、全國の人心を一定し、先帝の大葬に着手することとなつた。

かくて先帝御崩御により、世は諒闇におちいりて、日本全國、津々浦々、愁雲ふかく立ちこもり、上も下も、雜然として沈みがちにすごしたうち、慶應二年もいつしか暮れ、あくれば三年正月となつた。

百官詮議の上、御大葬はすべて、仁孝天皇の時の御例に倣ふべく、御陵地は泉涌寺と治定した。よつて同月十日夕、酉の亥、清涼殿において御遺骸を寶棺にをさめ奉り、御祭壇に安置し奉つた。御送葬當日は、同月二十七日で、酉の亥、御棺は、鹵簿肅々として御所

の南門より出で給ふ。送葬喪服の百官百司はいふに及ばず、途上、塔をなせる拜觀者も、これが最後の御幸かと、ひとしく聲を飲んだ。

この日天愁ひ、地悼み、霏々として寒雨降るさ中を庶民は道にひざまづき、合掌して流涕鳴咽、哀悼せざるはなかつた。ほどなく、御棺は泉涌寺に着したので、豫定の如く、莊嚴なる御儀式があり、東山御陵に埋葬し奉つた。

この大凶訃音が、はじめて關東に達したとき、皇妹和宮の御愁傷は筆舌のよく述べつくすべきところにあらず、天に憧れ地に伏して、ひたすら悲歎にけれ給ふた。さきに關東御降嫁の際以來、杖とも頼み柱ともすがり給ひて、ひたすらに御後見と頼み奉り、終生御援助を仰がんと思召し給ふた御兄弟帝、孝明天皇の御登遐なれば、その御落膽も一入で、涕泣慟哭、よその見る目もあはれで、左右奉仕の女房等も、慰め参らせん言葉もなく、ともに涙にくれるばかりであつた。

國步艱難の中に、いくたの御診念あらせられた先帝の御心を推察するだに恐懼の極みであるが、こゝに、數多い御製の中より、その二三を左に掲げて、御聖徳を偲び奉るよすが

としよう。

ぬば玉の夜すがら冬の寒きにも

つれて思ふは國民のこと

戈とりて守れものふ九重の

御階の櫻かぜそよぐなり

もろびとの心のかぎり盡してし

のちにぞ頼め伊勢の神風

この報が九州太宰府に至るとき、三條實美初め五卿は、寢食を排し、憂懼端坐、はるか東の空を拜して黙禱されること多時であつた。

「五卿滞在日記」を見ると、「主上崩御、五卿謹慎につき、慶應三年二月、墨田家より被進品のこと」として、次のやうに書かれてある。

慶應三年二月十一日

一 主上崩御に付ては五人衆へも別して謹慎の趣

御兩殿様御承知遊され候につき、御見廻として左の通り遣はされ候につき、達し方取計ひ候やう、宰府詰無足頭まで之を申入る。

○右御品は御用聞より差廻候旨をも申入る。

蒸菓子

一箱

博多素廻

催合一箱

充

あゝ、かくて配所の月を見る五卿に、遠慮なく月日のさきもりは立ち、慶應三年の春は又めぐり來たつたのであるが、果して五卿の歸洛の叶ふときは何時になれば來ることであらう？ 皇國の前途はなほ多事多端であつた。

皇政復古の黎明

三條と岩倉の提携

慶應も壬辰の夏ごろになると、大分、時勢は變つて、坂本龍馬や中岡慎太郎等が、筑前
の三條實美の密命をうけて、京都に上つて有志の公卿を説き、筑前と京都との連絡をとる
べく頻りに活躍してゐた。

土州の坂本龍馬は、幕府の注文した軍艦がその頃外國から到着して、海軍の武力侮るべ
からざるものがあることを知ると、寧ろ幕府をして政權を返上せしめ、まづその權力を奪
つて、その上で長州の兵を入京させるが得策であると主張した。さうして之を同藩の中岡
慎太郎に謀ると、慎太郎はかねて乾退助（後の板垣伯）と共に擧兵の企てをしてゐたので
飽くまで討幕説を主張した。

坂本龍馬はまた岩倉具視とも相談した。ところが會つて議論してみると、なか／＼岩倉
といふ人は共に事を謀るに足る大人物で、

「今の公卿中の第一の人物だ」

と、忽ち彼は一見して岩倉の人となり服した。

早速筑前に歸つて、三條實美にこのことを申上げると、實美は冷やかに、「

あの奸物と、何で事を共にすることが出来やうか？」

と答へた。

側にゐた東久世通禧が言つた。

「具視は決して奸物ぢやない。私が今まで黙つてゐたのは、岩倉と私とは親戚の間柄であ
るから、あなた方の嫌疑を避けて差し控えてゐたのですが、彼は決して奸物ではありません
ん」

「しかし此の前の和宮降嫁の事を斡旋したのも岩倉が發頭人ですぞ。千種少將有文、久我
内大臣建直と共に、岩倉中將具視は三奸と呼ばれて、志士から未だに恨みを買つてゐるこ
とをどう思はれるか」

と實美は、その岩倉に對する反感を露骨に示した。

「いえ。實際は、岩倉は忠誠な男です。その上才氣も勝れてゐます。事に臨んでよく断じよく謀る。たゞその謀るところが深く、断ずるところが鋭いので、往々にして他人の誤解を買ひ、嫉妬を蒙むるのです。たとひ今迄奸物であつたにせよ、その志を翻へしてわれわれと事を共にしようと言ふならば、共に皇事に盡すべきではないでせうか。彼と提携して事を謀らば成就すること疑ひありません」

と、東久世卿は熱心に坂本の言を裏書した。東久世はその時三十五歳、實美より四つ年上であつた。龍馬は三十三歳であつた。

坂本と東久世とが眞剣に説きすゝめるので、

「それでは、どうか一つ我々の志を彼に傳へて下さい。今後は互ひに相提携して、皇政復古の礎を築かう。なほ、京都に行かれたら、新選組その他暗殺團も多いこと故、十分身邊に氣をつけて事を計られよ」と、三條も坂本に頼まれた。

かうして三條と岩倉との間を連絡させたものは、坂本龍馬であつた。

そこで龍馬は、實美の旨をうけて再び京都に上つた。

龍馬を狙ふ人

京都の四條の橋を渡つて祇園に入ると、井筒屋といふ貸席があつた。

こゝへは、いつも新選組の猛者どもが出かけては飲んだ。その頃、評判の藝妓に靜香といふ女があつた。年は漸く二十を二つ三つ越したばかりの色盛り、藝もよければ纏織もよく座敷の取持ちもうまく淡白な氣性だつたから、當時なか／＼の流行ツ妓だつた。

ある日のこと井筒屋の二階座敷では、例によつ新選組の連中が飲めや唄へやの大騒ぎ、座敷には興を助けるために七八人の藝妓が侍つてゐたが、その中でも一きは目立つて、輝くばかり美しいのは靜香だつた。

「コレツ靜香、飲まんか……」

突然、かう言ひながら、グツと盃を献したのは新選組の伊東甲子太郎。

「有難うおます」

と書つて、靜香はスラリ立たうとした。

「いや、立つには及ばぬ。それ、投げるぞッ」

「まア、あんた……」

といふうちに、甲子太郎の投げた盃が靜香の胸もとに發止とばかり當つて、バタリ盃の
に落ちた。それを拾ひ上げた靜香、

「あんた、ほんまにきつい御方やなア、ホ、ホ、」

につこり笑つた靜香、なみ〜と獻された盃を口もとに近づけたかと思ふうちに、忽ち
グツと飲みほしてしまつた。

「いや、見事々々。なか〜話せるぞ。では今度はこの大きいので遣はすがどうぢや」

と、彼は自分の臍部から椀を取上げて、さしつけた。と、驚くかと思ひのほか、平然とそ
れを受けた靜香は、「有難うおます」とばかりたゞ一息に飲み干した。

「ウム、流石は京都第一、偉いぞ〜。さアこの勢ひで唄へ〜。流行唄がえ〜ぞ」

猪武者ども、スツカリ羽目を外してざわめく中に、靜香は三絃を取上げて、調子を合せ
る。冴えた撥音と澄みきつた美しい唄聲が、さわやかに流れ響くと同時に人々は何れも鳴
りを鎮めて、うつとりと聞き惚れた。しかし靜香が唄つた唄がわるかつた。

へ何を九條〜關白やめて、水戸の流れを見てくらせ。

といふ三四年前に流行つた唄であつた。それは昔からある、例のへ何をくよ〜川端柳、
水の流れを見てくらす。を作り變へたもので、その唄の意味は佐幕派であつた九條關白を
暗に罵り、勤皇派の水戸を褒めたもので、當時佐幕派たる新選組にとつては耳ざわりも甚
しい。

「黙りをれッ！」

大喝されて、靜香は三絃をひかへた。

「貴様、いま何を唄つたか……」

と、甲子太郎は眼を光らせながらつめ寄せた。

「あれ、あんた、そりや無體でおますがな。流行唄と言やはつたさかい、唄つたのでおす

がな

「黙れ、たとひ流行唄を唄へといつたとて、瘦せ浪人の作つたものを唄へとは申付けぬぞッ……」

大刀の柄に手をかけて、ジリ／＼とつめ寄る。ほかの藝妓はみな顔色を變へて、てんで逃げだした。が靜香は笑つて、盃を取り上げた。

「オホ、お腹立ちだすの？」

「何が可笑しい、これへ直れッ」

「直つたら何ないにおしやす？」

「斬つてしまふ」

「まアお斬りなはるつて……女を斬つて功名になりなはるなら、さア斬りなはれ」

かうなつては後へも退けぬ。甲子太郎は一刀の鞘を拂つて振りかぶつた。この態を遠くから見てゐた藝妓や仲居も、恐しいあまり仲裁も利けず、たゞウロ／＼してゐばかり。今は抜いた刀の血を見ず済むわけはない。折柄、隣り座敷から聲あつて、

「暫らくお待ちあれ」

と、間の襖をサラリ開けて出て來たのは土方歳三。

「オ、土方氏か」

「ウム、火急の用事で参つた。がそれにしてもこの場の有様は？」

「いや、面目次第もないが、實はこの女が無禮を働いたので手討に致さうと思つて……」

「ハ、ハ、ハ、新撰組の伊東ともあらうものが、多寡の知れた藝妓風情の一人や二人斬つたとて、何の甲斐にもなるまい。却つて世間の物笑ひの種となるやうなものぢや。仲裁は時の氏神とやら、今宵のところは拙者にお任せあれ」

「ウム、助け難い奴なれど、ほかならぬ土方氏の口添へだから、今宵のところは許してやる。命冥加な奴ぢや。行け」

靜香は黙つて立上ると、そのまゝ會釋もせずその場を外した。後で伊東甲子太郎、

と舌打すれば、他の一人が、

「鴨川のチョロ／＼水で晒した女にしては珍らしい度胸ぢや」

「その度胸に惚れこんで、あの坂本が愛妾……」

と土方が言ひかけるのを耳にはさんだ伊東、

「エツ、さてはあれが坂本龍馬の……」

と口惜しがった。

當時、坂本龍馬が幕府の政權返上の建言を主張して、筑前と京都の間を往復し、また頻りに東西諸藩の間を奔走してゐたため、新撰組が彼を暗殺する機会を狙つてゐたことはいふまでもない。當時、壬生浪士といへば泣く子も黙る。彼等は日に日に徳川幕府の衰滅を悲しむあまり、この世の思ひ出にと滅茶苦茶に志士を暗殺した。「生野の擧兵」「天王山哀史」に出て来る彼等の行動がそれだ。

土方歳三が、突然吉報を齎らせたのは、坂本龍馬が島原へ出かけたことを探知したことであつた。伊東甲子太郎は踊り上つて喜んだ。

「俺の置土産に一つ奴の首を取つてやらう」

飛電一閃、月の原

京都の島原、長崎の圓山、江戸の芳原は日本の三遊廓で、殊に島原は美人の多いのと、すべて昔からの格式を守つてゐることで評判であつた。東男に京女といふが、鴨川の清い水で磨き上げた京女は肌が美しいのと、言葉が優しく、起居が娜々として風にも堪えぬ柳の風情は、男の心をいやが上にも魅し去つたもので、あつたら勤皇の志士の中には意志薄弱なためこの太夫に陥りこんで遂に一生を棒に振つたものもあつた。

今しも、島原の大門際から、一挺の駕籠が急いで出てくるところだつた。

四五丁も走つたかと思ふと、人家の途絶えたところへさしかゝつたが、ふと茫々としてく草原の中で頻りにすだいてゐた蟲の音が、どうしたわけか一時にハタと止んだ。と思ふと、右手の暗闇からノツソリと立ち現はれた一人の武士。件の駕籠にすれ違ひざま、エヘンと殊更しく咳拂をした。

様子が變なので、駕籠屋が思はず足を止めた途端、エイツと飛電一閃、

「アツ」

と叫んだ駕籠屋。胴斬になつたは駕籠屋ならぬ小田原提灯。バツサリ地に墜ちてメラ／＼と燃え上つた。

突嗟に、駕籠の垂たを上げて出た人物。折柄西に傾きかけた半輪の月の光りに浮き上つたおもさしは、ほかならぬ坂本龍馬であつた。

兇漢が、やつ！と再び勢ひこんで斬りかゝつたのを、引き外じた早業は目にもとまらなかつた。

「卑怯千萬な、何奴か、名乗れツ」

と聲かけたが、相手はそれに答へもせず、途端にまた背後から躍り出た一人が、

「をのれ！」

といひざま、白刃ふりかぶつて斬りつけたが、流石に坂本は當代第一と謳はるゝ劍聖千葉周作の門に學んだ人だけに、腕も出来てゐたから、忽ち抜いた一刀で前方の刃を受流すよ

り早く、エイツと横に拂つた太刀先の鋭いこと。淺くはあつたが背後の者の二の腕を一寸ばかり斬つた。この勢ひに恐れをなして、相手は白刃をひつさげたまゝ、ドン／＼逃げ出した、と前なる一人も俄かに怖氣おそづいたか、闇中に没し去つた味方の後より雲を霞。

「莫迦な！」

その後を追はうともせず、チエツと舌打ちして靜かに一刀を鞘かばに納めた龍馬、駕籠を捨て、目指すは岩倉村。

坂本龍馬の最後

第一次の危機を 龍馬は見事に脱した。が遁のがれられない第二の危機が、つひに彼の身上に見舞つた。

それは着々として彼の計畫が歩をすゝめ、皇政復古の大號令が出ようとする一ヶ月前のことだが、その間のことを簡単に書くならば、慶應三年八月廿一日には桂小五郎が、坂本

龍馬に公議政體の貫徹を督促した。翌九月六日、幕府がイタリヤと通商本條約を締結したことあり、同月九日には土佐藩士後藤象二郎が福岡藤次と共に薩摩の小松帶刀、西郷吉之助に會つて、しばらく討幕の舉兵を延期するやうにと求めたが、西郷等は容れなかつた。この月十八日には、薩摩の大久保一藏等が山口に来て、いよく薩藩舉兵の策を決定したことを述べた。毛利敬親父子は、大久保を引見して、いよく兵を擧げて皇政復古の決行を約束し、薩摩と攻守同盟を結ぶに至り、こゝに皇政復古の機運は漸く熟した。二十日には坂本龍馬は海援隊を率ゐて、長崎より下ノ關に來た。

十月六日には、藝州藩主淺野茂長が、その臣辻將曹をして、書を幕府に提出させ、名分を正し、政權を朝廷に返上すべき旨を建言した。この日、大久保一藏や品川彌二郎等は、ともに中御門經之の別邸で岩倉具視と會合し、討幕及び皇政復古の事を相談したが、例の坂本龍馬は海援隊を率ゐてこの日京都に入つた。同月十四日には、朝廷は、討幕ならびに會津桑名二藩を追討すべしとの密勅を、薩摩と長州とに下し給はれた。皮肉にも、この日將軍徳川慶喜が參内して、政權奉還の表を上つた。

そして十九日には、慶喜は諸大名を召して、筑前太宰府にゐる三條實美初め五卿を大阪へ呼ぶことの可否、ならびに外國との交渉につき下問するところがあつた。次いで二十四日には征夷大將軍徳川慶喜が上表して、將軍職を辭職する旨奏請した。二十九日には、天皇（明治天皇の御事）は、勅使日野資宗を孝明天皇の御陵に遣され、皇政復古のことを告げさせ給ふた。

坂本龍馬は、専ら新政府の官制に意を用ひ、同志戸田雅樂と共に、次のやうな案を立てた。

- 一、關白は一人の事。公卿中で最も徳望あり智識を兼ね修める者を以て之に充つ。上御一人を輔弼し、萬機を關白し、大政を總裁す。
- 一、議奏は若干名の事。親王、公卿、諸侯の中、最も徳望あり智識ある者を以て之に充つ。萬機を獻替し、大政を議定上奏し、兼ねて諸官の長を合掌す。
- 一、衆議若干名の事。公卿、諸侯、大夫士、庶人を以て之に充つ。大政に參與し、兼ねて諸官の次官を合掌す。

といふのであつた。龍馬は、この案を後藤象次郎や中岡慎太郎に示すと、中岡はこれを岩倉具視に呈した。のちに大政復古の大勅令が出て新政府が組織された時、總裁、議定、参議の三職が制定されたのは、實にこの坂本の案が基礎となつたものである。

坂本と中岡とは共に土州藩を脱し、薩長聯合に盡力したことはすでに述べたが、坂本が海援隊を率ゐれば、中岡は陸援隊を組織して、處士としては共に土州藩中、右に出る者なき人材であつた。

大政返還のことが決つてのち、龍馬は早くも新政府の役割を定め、一日、その案を携へて西郷を訪ねた。そのとき恰度、坐には小松帶刀や大久保一藏がゐた。西郷はその案をジツと見つめてゐたが、

「坂本どん、この案中の役割に、あんたの姓名がないのはどうしたわけでおすか？」
すると坂本龍馬は、

「さや／＼、新政府の役に就く人材は多い。我儘氣儘な我輩の如きものには、とても役人など出来ん」

「では、あんたはどうするつもりか？」

「我輩は、世界の海援隊でも指揮しよう」

と言つて笑つたので、一同さて／＼坂本は大風呂敷の雄なるかなと呆れたといふことである。蓋し、彼のいふところ大なりといつても、彼は徒らに大言壯語するものとは違ひ、大に行ふ實行肌の人であつたことを知らなければならぬ。

彼の三十三の生涯は、實にその膽力の大きかつたことを知るに足る逸話が頗る多い。

慶應三年十一月十五日の夜。——咽ぶやうな鴨川のせゝらぎが、微かにひゞいて来る京都河原町の寓居、近江屋新助の二階で、龍馬はひそかに同志の中岡慎太郎と二人しきりに密議を凝らしてゐた。

星が三つ四つ、青さを増した十五夜の月が澄みひろがつた紺碧の中空に、銀盤をかけたやうにくつきりと浮んで、鴨の流れの音ばかりが、更くる夜の静寂を破つて涼々と鳴りひびいてゐた。

死のやうな寂莫！ 宵のほどの氣狂ひ染みたさんざめきも、何時しかハタと鳴りをしづ

めて、行き交ふ人の聲音も全く途絶えた京の街は、刻一刻と更けて行かうとしてゐた。折しも、下で烈しく戸を叩く音がした。

閉めきつた二階座敷では、坂本と中岡とが時の移るのも忘れて密議の眞最中、階下では坂本の忠僕彦助が夜の目も合さぬほどの嚴重な見張りをしてゐた。恰度その夜は、たまたま同藩士の岡本健三郎が、一少年菊屋峰吉を連れ來つて、共に時事を談じたが、夜が遅くなつて健三郎は鶏肉を買つてくるといつて、峰吉とその隠れ家を出た。そのあとへ、雨戸を叩く音が聞えて來たので、老僕彦助は眉を寄せながら、内から、

「どなたですか？」

と聲かけた。

「才谷先生はをられるかな」

夜更けの訪問者は、錆のある低聲でかう訊いた。

彦助はこれ聞いて幾分安心した。龍馬は平常、才谷梅太郎といふ變名で同志の人々と往來してゐたので、この變名を知つてゐる以上、無論同志の一人に違ひなからうと、彦助

は一人合點して、

「く、おられます」

「左様か、では一寸開けてくれ」

「く、」

土間に下り立つた彦助が、コト／＼音を立て、雨戸を引開けると、目近く、月光に濡れそぼちつ／＼と佇んだのは身長六尺にあまる偉丈夫。その後にも一人二人ゐる。

「先生は在宿か？」

と再び念を押した。

「へい。あなた方の御姓名は？」

彦助も重大な役目とて、スツカリは氣を許さない。

「ウム、我々は大和の十津川の者と、さう先生へ御取次願ひたい」

その聲も態度も、飽くまでドツシリ落ついてゐた。十津川といへば志士の巢窟みたいなところで、「天誅組」以來、ツイ先選ての「長州朝敵」の制札引剝しの志士も彼等の一味

であり、とき／＼ひそかに龍馬に會ひに来る者も多かつたので、彦助はやゝ氣をゆるめて「しばらくお待ち下さる」と、玄關に待たせておいて、階段の下まで来た。

それをジツと見送つてゐた件の武士、何と思つたか、ソツと聲を盗んで玄關へ上つた。彦助は些も氣取らなかつた。で、今しも、階段を一足二足上りかけた時、飛電一閃、抜く手も見せずヤツと下から斬りつけたから、何條堪らう、

「きやアツ……」

と彦助は悲鳴をあげて、のけざまに斃れた。

その血まみれの死骸を蹴返して、武士は飛鳥の如く階段を駆け上つた。

この烈しい突然の物音に、龍馬は刀を驚ぶかみ、中岡も短刀を手にしたが、その時早くも件の大男は、電光石火、エツと横薙ぎに斬りつけた。

これには流石の龍馬も體を躲す暇もなく、深く頭へ斬りこまれて、「しまった！」

と叫んだまゝ倒れた。

「おのれ！」

と、中岡は短刀を抜いて立上つたが、相手の大男は非常な達人、すかさず飛鳥の如く斬りこんだ一刀、中岡は肩先をしたゝか斬りつけられて、血煙り立つてドツと倒れた。

龍馬は齒を喰ひしぼりながら、やつと起上つたが、最初の重傷に眼くらんで、刀を抜く力さへもなく、漸く小刀の鞘を拂つたが、兇漢は中岡を斬つて返へす刀で、又もや龍馬の肩先へ一刀を浴びせた。

さらに中岡が重傷にも屈せず、起上らうとする途端、兇漢の血にまみれた白刃は、彼の背筋をな／＼めにサツと走つた。流石に剛氣な勤皇の志士も、つひに眞赤な血潮の海の中に横たはつて、うめき聲さへも立て得ぬ蟲の息。

刺客はこれを見て、共に死んだものと思ひ、階下にゐた一人と何やら言葉を交へ、その儘立ち去らうとしたが、急に中岡に近づき、その臀部に一刀を突き立てた。

中岡はその痛みで息吹き返へしたが、すでに抵抗力がなくなつたので、わざと死を装ふ

てゐると、兇漢は、

「——そのとき義經少しも騒がず、打物ぬき持ち……」と、音吐朗々、船辨慶の一曲を詠ひながら、悠然と立去つた。

中岡は刺客の立去つたのを見ると、襖に掴まつて起き上り、中腰で窓敷居に這ひ上つて隣家の人を呼ぼうとしたが、體軀に力がなく、聲も出ず、忽ち疊の上へ轉げ落ちた。

龍馬もつゞいて正氣づき、刀を杖にして、よろめきながら、燈火に近寄り、抜き放つた鋭刃を燈の光に照らして打ち眺め、

「残念ぢや」

と唸つた。すると足もとに中岡が齧めいてゐるのが目にとまつたから、

「中岡、どうぢや動けんか？」

「駄目ぢや。油断したのが一生の誤り。しかし強い奴ぢやつた。俺はもうとても駄目ぢやお前は？」

「俺も頭をやられた。もういかん」

と語り合ふ言葉も途切れ〜。

龍馬は前にのめつて、そのまゝ絶命した。

傾きかけた白つぼい月光は、何のかゝわりもないといったやうに、蒼ざめた二人の死顔と、陰惨な室の中を照らした。龍馬このとき年わづかに三十三。可惜、曠世の大才を抱きながら、名も知れぬ一刺客の兇刃に斃れたのであつた。

この時の刺客が何者であつたかは傳つてゐない。しかしある説には、實は伊東彦太郎といふ薩州の浪人で、小太刀を取つては當時の達人、幕末の隠れた劍豪ともいふ。その説をなすものは、この彦太郎は少壯の頃新撰組に救はれた恩義に感じて一生を龍馬暗殺のため棒にふつたが、後年それをいたく悔ひ、斷然太刀を棄て、比叡山に上り、そこで餘世を送つたともいひ、或は他から暗殺されたともいふが、その眞偽のほどは保證出来ぬ。しかし天井の低い、しかも狭苦しい座敷の中での奮闘は到底尋常一様のもに出来る業ではなくまさに一流を究めたその道の達人には違ひない。それに坂本にせよ、中岡にせよ、共に千葉門下で鳴らしな腕達者だけに、かう早く斬られたといふことは、天運盡きたと云はうか

返すくも残念な事であつた。

やゝあつて、少年峰吉は一人で戻つて来てこの有様を見るや、驚き慌て、すぐに飛んで出て、凶變を陸援隊に報じた。

忽ち、駈けつけた同志の人々は、中岡の方だけがまだ絶命せぬのを見て、醫者を呼んで手當をしたが、中岡はもはや起つべからざるを知り、岩倉具視のもとへ遺言し、

「皇政復古の大業は、偏に岩倉殿の御力に頼み参らす」といつて絶命した。時に年三十。

宮中御前會議

慶應三年十二月九日、いよいよ皇政復古の大號令が發表されることとなり、こゝに上空前の驚天動地の幕は切つて落されることゝなつた。

この日、朝廷では夜來の會議が漸く辰の刻に至つて終り、攝政二條齊敬以下いづれも退

出したのに拘らず、中山大納言忠能、正親町三條大納言實愛の二人は猶ほ居残り、まづ千種侍従有任を勅使として、岩倉前中將具視の邸に遣はし次の命を傳へたのであつた。

今度思召を以て蟄居を免ぜらる。直ちに復職參朝これあるべき旨仰せ出され候事。

と。それと同時に、長州の毛利父子に對する左の御沙汰書を、藝州の世子淺野紀伊守茂勳に命じて長藩に傳達せしめられた。

このたび大樹政權を還し奉つり、朝廷一新の折柄、いよいよ以て天下の人心をり合ひ相つかざるに於ては、追々復古の典も行はれ難く、深く宸襟を惱まされ候。且つ、來年御元服、並びに立太后等、おひく御大禮行はせられ、且つ又先帝御一周忌に相成り候につき、なほさら人心一和專要に思召され候間、先年來長防の事件、かれこれ混雜これあり候へども、寛大の御處置あらせられ、大膳父子、末家等、入洛をゆるされ官位もとの如く復され候旨、仰せ出され候事。

さらに、勅詔が筑前太宰府の五卿のもとに下り、三條實美、三條西季知、東久世通禧、壬生基修、四條隆訶に對しては、復位入京を命じ、亡くなられた錦小路頼徳に對しては官

位を復し、所在不明の澤宣嘉に對しては勅勘をゆるされた。五卿のもとに傳達された勅諭といふのは、

頃年天下紊亂、人心不和を生じ、況んや今や外國の交際日に隆にして、國家の安否危急の秋に候。しかるに今度朝政一新、おひく舊典復古、明春御大禮を行はせられ候時節に候間、人心一和を先務と遊ばせられ、近年幽閉の輩を復させられ、往々怨志なく人和一齊し、沿革大成、内を整へ外を制するの次第相立つべくと思召され候間、御趣意を奉戴し、上下和親し、皇國の情態存すべき事。

といふのであつた。

忽ち五藩の兵を以て、禁門の外は警衛され、皇政復古の大號令が出ることとなつたがこれによつて國威挽回の基本は立ち、以後は攝政、關白、幕府を廢め、その代りに總裁、議定、參與の三職を置いて天皇陛下が新しく萬機を開召され、萬事、神武天皇創業の時代に基づいて、舊弊打破、國民は今までの懦弱な風を一新して、盡忠報國の誠を以て奉公することとなつた。

新政府の顔ぶれは、有栖川宮熾仁親王を總裁に、御室宮純仁親王、山階宮晃親王、中山忠能、正親町三條實愛、中御門經之、島津忠義、徳川慶喜、松平慶永、淺野茂勳、山内豊信を議定に、岩倉具親、大原重徳、萬里小路博房、長谷信篤、橋本實麗を參與に任せられた。そして、二條齊敬や賀陽宮朝彦親王以下の公武合體派の公卿の參朝を停め、謹慎を命ぜられたので、實權は自然岩倉具親の手中に歸した。

天皇は夜に入つて小御所に出御遊ばされ、總裁、議定、參與及び尾、越、薩、藝、土の五藩の重臣を召して會議を催されたが、こゝにはしなくも、宮中御前會議において、山内容堂と岩倉具親との間に大激論が生じた。

中山忠能が恭々しく玉座に一禮して、少し膝を進め、一同に宣旨を述べた。

「今や徳川慶喜大政を奉還して將軍職を辭したので、その請をゆるして皇政復古の事を擧ぐるにあたり、まさに萬古不拔の國是を確定して、國家永遠の基礎を鞏固にしたい。諸臣よろしく聖旨を奉體して正義公論を盡されよ」

すると、劈頭第一、山内容堂が襟を正して席を進み、

「かやうに大改革をなされて、維新の大業をお定めなさるといふ思召なら、速かに徳川内府（慶喜）をお召しになつて、大議に參與せしめられるのが當然であらうと思ふ」すると、大原三位がそれに反対して、

「いや、徳川慶喜は政權を返上はしたが、果して忠誠の精神から出たのかどうか、まだハツキリせぬから、俄かに召してこの議席に出すことは宜しくあるまい」

これを聞くと、容堂は、忽ち憤然として色をなし、抗辯していふには、

「大政維新の初めには公明正大、毫も私心を挟まずして萬事を處置しなければ、決して天下の民心を服することは出来ぬ。しかるに今日の擧を見るに、悉く陰險であつて、諸藩の兵が兇器を擁して禁闕を守護するなどは、維新の初政にあたり不祥の極みといはなければならぬ。そもく元和以來、二百餘年間の泰平の治をなしたものは、實に徳川氏である。されば朝廷は宜しく長くその勤勞を思はせられるべきところ、しかるを一朝にしてこれを疎外し去り、大議に參與させられないことは、慘忍酷薄の御處置といはねばならぬ。且つ慶喜は夙に英明を以て聞えてゐる。朝廷今や人材を要求せらるゝのときに當り、これを召

してその意見を問はれなければ、その御主意に忤るものと考へる。二三の公卿方には何の定見あつて、このやうな暴擧をなさるゝのか。察するにお若い天子を擁して、權柄を竊取する底意であらう？。これ實に天下の亂を開くものと云はなければならぬ」と、大變な權幕であつた。

岩倉具視はこれを聞くと、

「容堂、この席を何と心得られる？ 畏くも主上御親臨あつて、衆義を開召さる御席であるぞ。少し言動を御慎みなさつたらよからう。恐れながら、主上は不世出の英才であらせられ、維新の創業を立て給はんとなされる際にあたつて、今日の事たるや悉く震斷に出たものである。何たる言ぞ、主上に對して御無禮でござらう」と吐りつけた。

容堂は御前のことであるから、その失言はお詫び申したが、その主張は曲げない。越前の春嶽も亦、容堂の説に賛成して、

「皇政復古のはじめにおいて、刑罰を先にして徳義を後にするのは甚だ宜しくござらぬ。

徳川氏二百餘年の泰平を致した功勞は、今日の罪責を償ふに足りません。よろしく容堂の言を御採用になつて、慶喜をお召しなされ」と言つた。

岩倉具視は一段と聲を勵まして、

「いや、徳川家康は天下泰平の治を致したが、子孫がその功によつてその權力を弄し、諸侯をおさへつけ、公卿を輕蔑し、甚しきは皇室を凌いで、大義名分を紊ること既に久しい。特に嘉永癸丑以來、勅使に違背き、綱紀を紊亂し、内は憂國の親皇公卿を幽閉し、勤王の志士論客を殺害し、外は歐米の諸國と結んで貿易を許し、ために怨みを國民に受け、禍を社稷に歸した。その罪斷じて少からぬ。慶喜にして自らその罪を責め過を悔ゆる心あらばよろしく官位職祿を辭し、土地人民を返納すべきである。しかるに事ここに出でず、徒らに政權の虚名を奉還し、土地人民の實力を握る、その心の邪正は論ぜずして明々白々。今俄かに彼を召して、大議に參與せしむべきではござらぬ」

これにつゞいて大久保一藏が次の間から、得意の辯を振つた。

「さきほどの土州越前兩侯の御議論は、まだ慶喜の精神をうがつたものとは言へませぬ。徒らに空言を以てその正邪を争ふより、むしろこれを實行に示されるがよい。慶喜にして官位職祿を辭し、土地人民を返納して、不平不満の色がなければ、その心は至誠と認めてもよい。先づそれを實行した上で召して廟議に賛せしめてよろしからうが、さうでない限り、彼の心中は誑詐をいやくものであるから、速かにその罪を鳴らして之を討伐すべきである」

と云つた。

これを聞いて後藤象次郎が、

「それは宜しくない。皇政復古の初めにあたつては、萬事公正でなければならぬ。公正を捨て、陰險を事とせられるのは何事か。よろしく土州越前兩侯の御説通り、慶喜を召して廟議に賛せしめ、以て一視同仁の實を示させ給ふべきである」

と、各々議論は強硬で、容易に決議しさうにもなかつた。容堂と春嶽の説に賛成するものは、その臣下の田宮如雲、丹羽淳太郎、田中邦之輔、中根雪江、酒井十之丞、神山左多

衛の面々。また岩倉の説に賛成するものは、薩州侯島津茂久、藝州世子淺野茂勳、大久保一藏、岩下佐次右衛門等であつた。

廟議二派に分れて決定せず、風雲まさに急ならんとした。

そのとき中山忠能はツト席を離れて、二三の人々と密語した。これを見て形勢の不利に傾くことを懼れた岩倉具視は、勵聲一番、

「主上親しく臨御ましまし群臣の議を聞てし召され給ふとき、みだりに坐席を離れて私語せらるゝのは不敬でござるぞ」と叱つた。

主上はこの光景を見そなはして、つひに暫時休憩を宣せられた。

短刀一本

このときの御前會議には、西郷吉之助は列席しなかつた。彼は、建禮、宣秋、清所の三

門を守り、乾門に豫備隊を置いて嚴重に固めてゐたのである。

御前會議に列席してゐた薩摩の岩下佐次右衛門は、どうも土州越前の佐幕論が烈しくて岩倉や大久保の二人が困つてゐるから、これは一つ西郷の意見を聞くがよいと思ひ、急使をやつて西郷を呼びにやつた。

西郷は會議の席へ出るつもりはないから、袴も穿かず、著流しのまゝ兩刀を帯びて、非藏人口まで來た。岩下は西郷に會ふと、御前會議の光景を一通り話し、

「どうも反對論が多くて岩倉公も一藏も困つてゐる。こりやどういふ風にしたら治まりがつくだらうか？」

と西郷の意見を尋ねた。

すると、吉之助は大きな眼玉をギョロリと光らせて、たゞ一言いつた。

「何んの方法も手段もごわすか、短刀が一本あれば始末がつくぢやないか、さう岩倉公へも申上げ、一藏へも傳へてくれ」と言ひ捨て、ブイと歸つてしまつた。

岩下は早速、このことを岩倉具視に告げると、具視は感服して幾回となくうなづいて、今は心中大いに決するところあり、すぐ短刀を取出して懐ろに入れ、ひそかに藝州世子淺野茂勳を一室に招いて、

「あなたは我輩と同論ぢやが、土州の愚論によつて解決を見ぬのは残念ぢや。ついでに電光石火、事を一舉に決しようと思ふ。どうだらう？」
と言ふと、茂勳は大いに驚き、

「ともかくも家臣辻將曹つじしやうそうをやつて象次郎に説かしめるでござらう」と答へ、直ぐ將曹を召して何かいひつけた。

將曹が象次郎を探すと、そのとき象次郎は大久保一藏を諸大夫の席に招いて、容堂の説に賛成させようと盛んに論じまくつてゐた。しかも一藏はそれに應ぜず、反駁はんぱくして盛に論争最中であつた。主命をうけて象次郎を探してゐた將曹は、この論争の聲を聞きつけて入つて來ると、象次郎を室からつれ出し、そつと、

「もはや非常準備も出來たげな。徒らに反對されるは宜しくあるまらう」

と言つた。

象次郎はそれと悟つたので、大いに驚き、直ちに容堂に會つて、

「君公には、すでに情理を盡して滿腔まんかうの御不満を吐かれた上は、この上御抗辯あると、慶喜と密約あるやうに疑はれるばかりですから、もういゝ加減なところで切上げておしまひなされませ」

と説いた。

そこで、さすが頑強な容堂も心機一轉、つひにその言に従ふ旨を答へ、且つこのことを松平春嶽にも通じた。

かうして再び列座して御前會議は續行されることゝなつたが、そのときには最早や誰も異議を唱へるものもなかつた。評議一決、復古の基礎が茲にかたまつたのであるが、御前會議が終つたときには、東の空は漸く白みかゝり、瑞祥ずいしやうを告げる鷄鳴の聲が禁門の内外に聞えた。

維新の曙光

十二月九日の復古の大號令と共に、五卿の官位復舊及び入洛許可の御沙汰が出たので、大山彌助や西郷眞吾等は春日丸に乗つて、筑前太宰府へ五卿を迎へるため出發した。

潜龍つひに雲に従ふの時は到來した。五卿のお喜びは如何ばかり。

慶應三年十二月十九日、太宰府における五卿は、官位舊に復し、この日迎へられて、京都に向ふべく、三年前には囚人の如くにこの地に送られてきた流落の五卿、今は長柄の駕に乗り、悠暢として出發の途についた。一卿毎に、十八人の壯士がつきそひ、外に警護として、薩摩の壯丁一百人、前後兩隊にわかれて、その行装の凜々しさは、また昔日の比ではなかつた。

五卿は二十一日には博多より薩摩の蒸汽船春日丸に乗り、二十二日下ノ關を経て、二十三日には三田尻に着いた。

そのとき、毛利忠正父子は三田尻の豪家貞永の宅で五卿と久しぶりの會見をし、前途の事を協議になり、それから船が出る時には、廣澤兵助と井上聞多の二人がこれに陪從して二十五日、大阪安治川口に達した。直ちに迎えられて薩州邸に入り、翌二十六日、淀川を溯る。紫の幔幕を張りめぐらし、白鳥毛の槍を立て、眼もあやに飾り立てた屋形船が、衆目の中に淀川を上つた。これに隨從する供船、三十艘、前後を護衛しつゝ、伏見へ向つたが、もちろん、一行の中には、かの純眞無垢の美少女お京も加つてゐた。

「思へば文久三年八月十八日、寝耳の水の政變から京都を追はれて以來、今年慶應三年十二月二十六日まで、滿四年と五ヶ月、長い流寓の生活であつた。辛い、悲しい、忍従のむづかしい年月であつた。その間に天下の形勢は漸く變り、暗い夜が、ほのくぐと明けた感じがする。お京、そちも嬉しからう」

輝やかしく晴々とした實美の顔を仰いで、お京はつゝしまやかに、につこり笑つて星のやうな眸には、銀のやうな滴が光つてゐた。

船が伏見につくと、出迎への薩長兩藩士が、肅然と襟を正しうしてゐたが、どうしたと

とか、美しく飾つた本船から現はれたのは、隨行の面々であつて、意外にも供船の中から現はれたのが五卿であつた。それは、會桑はじめ幕兵が途中要撃しても、何等懸念のないやうに、萬全の策を前以つて講じてゐたのであつた。

その日は、薩邸に一泊した。

翌二十七日、卯の刻、伏見を發した。今日は薩長二藩の兵士が護衛し、彦根、土州の兵士等も途中から加はつて守つた。

「西下したときは、ひどい雨と風に地獄の道を歩くやうな氣がしたが、今、晴れて京都に歸る日は空も上々吉。しかしあの時は久坂もゐた。來島もゐた。眞木もゐた。みんな烈々たる勤皇の志士ばかりであつたが、今はすでに亡し。それに我々の歸洛の手引きをしてくれた坂本龍馬も、つい一月前に非業の最期を遂げたかと思へば……」

と實美は懷舊の情にたえず、ハラ／＼と涙をこぼした。五卿ひとしく感慨無量であつた。

それから稻荷社において小憩し、そこで五卿は衣冠を改めて、直ちに宮城に向つた。

かくて、五卿は参内し、三條實美は議定に、東久世通禧は參與に任ぜられ、二更の頃は

ひ各々退朝してその邸に入つた。

この日は恰度、薩長土藝四藩の練兵式が行はれ、主上にはこれを御覽あらせられたので五卿には拜謁を賜はらなかつたが、翌朝、新帝に拜謁して回天の御喜びを申上げた。それにしても、先帝の御登遐遊ばされた御事は、五卿にとつて、やるかたなき悲しみであり、御陵のおんに額づいて、實美は次の一首を詠んだ。

めぐみありてわれは都にかへれども

かへりきまさぬ君ぞかなしき

次に、それまで長州阿武郡大井村弘誓寺に逃避中であつた澤宣嘉も、同じく官位を復されて、五卿歸洛の翌日出發し、五卿におくれて歸洛したのであつた。

宣嘉は、かの生野の義舉に敗れてのちといふものは五卿とは居所を異にしてゐたのであつたが、五卿と互ひに連絡のあつたことと言ふまでもない。しかし五卿と離れて一人だけ逃避蟄居しなければならなかつた彼は、どんなに寂しい思ひがしたであらう。

旅ねする里こそかはれかはらぬは

ともに世を思ふ心なりけり

と、あるとき三條西季知が詠んで、宣嘉を慰めたことがあつた。宣嘉はそれへの返歌に
海山も年もあまたにへだつれど

へだてぬものは心なりけり

と答へた。

また、東久世通禧は、その消息の末に、次のやうな歌を書き送つたことがある。

かしのみのひとつの事もなさずして

心つくしに三とせ經にけり

これに對しては、宣嘉は

かしのみのこの身ひとつを君ならで

ひろふ人なき世をいかにせん

と返歌した。かういつた工合に、宣嘉は五卿と離れて匿かれてゐたとはいへ、たえず音信のやりとりはしてゐた。そして愈々十二月二十八日、召されて京都にかへることになつた

が、その日はシト／＼と雨が降つてゐた。

ふる雨もなにかいとほぬれ衣の

かわけるけふの門出とおもへば

と彼は長い配所の年月をかへりみて感慨に浸つた。かうして宣嘉は、明治元年一月二十一日歸洛、參與職を拜命した。

かくて、それまでは岩倉具視が一人で要務に當つてゐたが、今度は三條實美が加はつて樞機に與かることゝなつた。あゝ四年半の星霜は決して短いものではなかつた。至誠菅公の蹟を偲び筑紫に蟄居した五卿の忠誠は、今ぞ天を貫き、妖雲攘ひ去つて、濡衣はこゝに晴れて廟堂に復し、君側に咫尺することとはなつた。鎌倉覇府以來六百年、政權武門に歸して横暴のあらん限りを盡した幕府もこんどは忽ち地位一變、各藩の藩主みなその領土を返納して、朝廷に還し奉つり、はじめて維新回天の地固めが出来たのである。かくて、慶應四年の春を迎へた輔弼の臣の意氣はあがつた。戸を明くれば一望見渡すかぎりの白凱々たる大雪、玲瓏な朝日をうけて生々の氣は天地にみなぎり、恰も新天新地を淨化した如き

景色に、實美はしみくと見入るのであつた。

餘光

思へば四年半の天涯流落の間、たとへ輦轂の下を遠く離れて身は荆棘の道をゆきながら、その一心は君側に奉仕して、いつかは奸悪の徒を一掃しようと志した盡忠報國の眞精神は、今日の時世においても要求される精神でなければならぬ。その逆境において詠まれた數々の歌によつても、その巍々たる志操は、脈々として字句の間に躍つてゐるものゝあることが知られる。

七卿中の最年長者であつた三條西季知は、長州流落中に、かう詠んでゐる。
のどかなる昔の風にかをらせて

雲井のさくら見む春もがな

山を抜き海をもせかばせきつべし

ただ一すぢの誠とほらば

仕へつゝ身のあるものと知らぬこそ

臣の道とは云ふべかりけれ

その流遇中、時局日にましわるくなり、七卿をしていよく窘窮せしめ、全く暗黒の中を彷徨するかの思ひの中に、七卿が六卿となり、六卿が五卿となりつゝ身邊寥落、悲風慘憺たる有様におかれても、なほ一片秋々の赤心は凜烈たるものがあつたのである。季知の述懐した歌の中に、

君がため思ふ甲斐なきちりの身も

心にちりはすゑぬなりけり

清からぬ名は流さじと思ひけり

いかなる水の浮瀬なりとも

くだけでも玉はひかりの残るべし

思へば人は名こそ惜しけれ

と、太宰府の蟄居中に詠んだのに見ても、その心事の高潔さが偲ばれる。季知は五年にわ

たる流離の生活から脱けて、許されて京都に迎えられるや、新政府の參與となり、林和靖間詰を仰せつけられた。他の諸卿が、或は外交に、或は軍政に花々しい活躍をはじめた間にあつて、ひとり季知だけは、歌道をもつて 明治天皇に奉仕したのであつた。すなはち御歌掛として、御製を拜見する役目であつた。季知の部下には、八田知紀、福羽美静、渡忠秋などいふ人々があつた。

明治元年九月二十日、京都御發轍遊ばされて東京に行幸あらせられた際には、季知は騎馬姿で供奉したが、その翌年の三月、いよいよ御遷幸のときにも、近習として彼はその御行列に加はつた。その折、秀麗なる富士の嶺を仰いで聞えあげた歌に、

君よ君よくみそなはせ富士の根は

國のしづめの山と云ふなり

とあつた。また箱根越えが老體によほど應へたものらしく、我と我が身を勵まして詠んである歌に次の一首がある。

いはが根にとりすがりても箱根山

君につかふる道はおくれじ

三條實美は已に描いてきた通りであるが、彼のやうに深窓の中で婦女子の手に養育されてきた執符の子弟が、どんな豪傑も到底耐へることが出来なからうと思へる荆棘の苦難の中に、よく善處して、つひに大政輔翼の大任を全うし得たのは、一にその崇高な盡忠の精神があつたからである。實美の歌に、

大君のまけのまに〜ひとすぢに

つかへまつらむ命しぬまで

といふのがある。またある時、森寺大和守をわざ〜太宰府から山口に遣はして、久坂玄瑞の懸前にそなへた歌に、次のやうな一首がある。

九重のみはしのちりを拂はんと

心も身をもうちくきたる

そして、實美自身も亦、いつか國事に斃れる日が来るであらうことを期して詠んだ歌に

かういふがある。

梓弓もとすゑたがふよの中を

神世の道に引きかへしてむ

と。以つて皇政を古に復さうといふ、ひとすぢの眞ごころが三十六文字の中に躍動してゐるのが窺はれるであらう。また、

うき雲のかゝらばかゝれ天つ風

ふき起るべき時なからめや

と詠んでゐるのを見ても、彼が、必ずや雲霧を排して天日を仰ぐ日の到來する日のあるべきを、固く信じて疑はなかつた強い、鬪争精神を窺ふことが出来る。必ず勝つ！この信念なくて、決して難局は突破出来るものではない。

一見ただ優しい、温和な實美ではあつたが、その外柔内剛の精神は、そのまゝ歌に映出してゐると思ふ。

薩長聯合も成り、五卿の歸洛となつたが、太宰府出發の直前、慶應三年十二月三日、薩

長二藩の間にあつて斡旋につとめた坂本龍馬と中岡慎太郎が、京都において暗殺されたとの急報がもたらされたとき、太宰府では神道をもつて兩雄の亡魂を祀つたのであつたが、このとき實美は、次の歌三首を靈前に供へた。

世を思ひ身をおもひても誓ひてし

人のうせぬる事ぞ悲しき

武士のその魂やたまちはふ

神となりても國守るらむ

君がため世のため思ひ歎くには

悲しといふも悲しかりけり

蓋し、龍馬は、實美と岩倉具視との間を結びつけた人であり、それを思ひこれ思つては、感慨に堪へなかつたらう。悲しといふも悲しかりけり、の一句、まさによくその眞情を吐露してゐる。

かうして皇政復古すると共に、歸洛し、岩倉具視と相携へて、新政府の双璧となつたの

であるが、明治元年九月二十日、車駕東京に成らせられるや、實美は關東大監察使としてこれに隨從した。そのときの諷詠に、

月と日のみ旗の風にむさしの、

あを人ぐさも打ちなびくらむ

と。すでに奥羽の山河も平定し、北陸の綏撫も行きわたり、至るところ御稔威に輝く有様を詠んだ歌である。

しかし一步、裏面を覗けば、必ずしもさうではなく、まだ世の中は何處となく不穩と不安の雰圍氣にあつたけれど、それらの不安や薩長兩勢力の鬭争と相尅の中にあつて、維新の大精神を貫徹しようとした彼の勞苦は、尋常一様の苦心ではなかつた。が、幸ひにして江戸は平定に歸し、奥羽地方も皇化に浴し、廢藩置縣の世の中となつて、中央集權が實施せられたために、維新の大業もこゝに始めて軌道に乗つてきたのであつた。

そこで、突發して來たのが、かの朝鮮問題であつた。岩倉具視は全權大使として、明治四年に歐米に向つて出發してゐたので、不在中は、萬事、實美が國務を執掌してゐた。こ

の朝鮮問題は、すでに説くまでもなく、あまりに有名な出来事である。ただ、われ／＼は維新の黎明を迎えるまでの長い國歩艱難の中に、無限の教訓と示唆とを見出し、八十年後の今日の時局に鑑みて、感奮興起せしめられるもののあることを痛感させられる。

實美の歩いた荆棘の道も、實美を繞る多くの志士の行動を見ても、それは皆、後世に對する一大教訓であり、その餘光が長く當世を照らしてゐるところのものは、純一無二の臣民道の實踐にあつた。かれらの尊皇攘夷の精神を今の世に生かし、日本が正々堂々として大東亞共榮圈の太陽となり、曉の雲を破つて、國威を八紘に照り輝かしめるのは、實に今日われ／＼の責務でなければならぬ。

われ／＼は必ず勝つ。勝つて勝つて勝ちぬかなければならぬ。

——をはり——

著者略歴

明治三十三年二月一日、山口縣大津郡深川村に生る。

大正八年三月、山口縣立萩中學校卒業。しばらく郷里の小學校正教員をつとむ。その頃「地平線」といふ雑誌を出した。のち文學を志して上京し、以後は殆ど獨學してきたが、自叙傳風な創作「青春の夢」がその間のことを十分に描いてゐる。

又、多くの雑誌を編輯してきた。「文學世界」「政界往來」「東方公論」など。自分で出した雑誌では、震災前に「縱横無盡」があり震災後に同人雑誌「獵人」がある。「獵人は當時かなり反響があつた。主なる著書は左の通り。

土の力（創作集）

越山堂發行

眞實への騎士（創作）

東方公論社發行

世紀の英雄松岡洋右（評傳）

牧書房發行

長州征伐（歴史小説）

皇國青年教育協會發行

生野の擧兵（歴史小説）
 皇國青年教育協會發行
 牧書房發行
 動亂の世界（現代情勢）
 皇國青年教育協會發行
 天誅組（歴史小説）
 皇國青年教育協會發行
 天王山哀史（歴史）
 牧書房發行
 維新風雲錄（歴史創作）
 皇國青年教育協會發行
 決死の密偵行（創作）
 牧書房發行
 武士道散華（近世烈士傳）
 皇國青年教育協會發行
 南海雄飛の人々（歴史）
 近代小説社發行
 宿命に踊る人々（創作）
 高松書房發行
 青春の夢（創作と隨筆）
 高松書房發行

などがある。昭和十六年秋より平凡社の「大百科辭典」の編輯に携はる。現住所は、東京市瀧野川區瀧野川町一九五六番地。



荊棘をゆく者
 出版會承認(イ60245)

昭和十八年七月十日印刷
 昭和十八年七月廿日發行
 (初版八千部發行)


著者 萩原新生
 發行者 東京市豊島區高松町二ノ二八 相良繁一
 印刷者 東京市神田區西神田一ノ九 田中舜二
 東京三二一四

發行所 東京市豊島區高松町二ノ二八 高松書房
 會員番號一一六一三三

配給元 東京市神田區淡路町二ノ九 日本出版配給株式會社

平賀印刷所

終



賣價(税込) 1.60